

## 梅の花

池松 孝子

今では「花」と言えば桜を指すが平安朝以前「花」は梅であった。梅は弥生時代に大陸から入って来たとか、遣唐使によつて持ち込まれたとか諸説ある。しかし、梅を詠んだ歌などから「万葉集」以前であることは確かだ。歴史的にも紀元前から塩と共に貴重な調味料であった。また、薬効の意味でも貴重だったろう。

歴史の長い梅だけに近い種あらず、すももなどと交配して三百以上の品種があるという。紅梅、白梅から梅が香、探梅、梅林など梅に関する季語の多さは他に類を見ない。

あの『西郷南洲翁遺訓』には「耐雪梅花麗」とある。冬の寒さに耐え、控えめに己を律する強さには誰もが魅了される。白梅は早春の他の花に先駆けて咲き、春を告げる。色、姿の美しさ、さらに香りからも、健気で清楚な人格のようなものが感じられると言ったら言い過ぎだろうか。我々はこうして花にまでも精神性を求める。身の引き締まる思いがする。季語になる所以でもあろう。梅は蕾の時から香りがあるという。梅は香りに桜は花にと対比されるのも面白い。

老梅の白の気品は衰えず

石谷 淳子

「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」と言われる。桜はやたらに枝を切ると切り口から感染して腐敗するという。一方、梅は剪定して切り詰めていかないと、若枝がつんつん伸びて雑然として何とも品のない姿になってしまう。梅の実をたくさんつけさせるためにも剪定は欠かせないものだったのだろう。こうして、梅の味わい深い日本人好みの枝ぶりが生まれることがわかる。

また、二月と聞くと尾形光琳の「紅梅白梅図屏風」が思い出される。「臥竜梅」に象徴されるようなたくましい梅の古木を愉しみ、幹の屈折した枝ぶりを愛でる我らの伝統を心から誇らしく思う。白く緑に苔むした枝ぶり、その骨太の造形美は、華道、茶道は言うまでもなく日本画、焼き物、和服など多方面の伝統芸術に欠かせない。馥郁たる香り、大陸風の気品あふれる姿を桜とは違う感覚で先達は好んだのだ。